

京都大学大学院 人間・環境学研究所 修士課程 入学試験問題 例

1次試験 外国語 (日本語A)

(注意) 解答は、設問(ローマ数字のI、II、III……)ごとに別の解答用紙を用いること。

縦書きの日本語により、全問解答しなさい。

I 次の文を読んで、後の問に答えなさい。(40点)

ある雨のふる秋の日、わたしはある人を訪ねるために横浜の山手を歩いて行った。この辺の荒廃は、震災当時とほとんど変わっていなかった。もし少しでも変わっているとすれば、それは一面にスレートの屋根や煉瓦の壁の落ち重なった中に、藜の伸びているだけだった。現にある家の崩れた跡には蓋をあけた弓なりのピアノさえ、半ば壁にひしがれたまま、つややかに鍵盤を濡らしていた。のみならず大小さまざまな、譜本もかすかに色づいた藜の中に桃色、水色、薄黄色などの横文字の表紙を濡らしていた。

わたしはわたしの訪ねた人とあるこみ入った用件を話した。話は容易に①片づかなかった。わたしはとうとう夜に入った後、やっとその人の家を辞することにした。それも近々にもう一度面談を約した上のことだった。

雨は幸いにも上っていた。おまけに月も風立った空に時々光を洩らしていた。わたしは汽車に乗り遅れぬために出来るだけ足を早めて行った。

すると突然聞えたのは誰かのピアノを打った音だった。いや、「打った」と言うよりもむしろ触った音だった。わたしは思わず足をゆるめ、荒涼としたあたりを眺めまわした。ピアノはちょうど月の光に細長い鍵盤をほのめかせていた、あの藜の中にあるピアノは。——しかし人かげはどこにもなかった。

それはたった一音だった。が、ピアノには遠いなかった。わたしは多少無気味になり、もう一度足を早めようとした。その時わたしの後ろにしたピアノは確かにまたかすかに音を出した。わたしはもう振りかえらずにさっさと足を早めつづけた、湿気を孕んだ一陣の風のわたしを送るのを感じながら……

①わたしはこのピアノの音に超自然の解釈を加えるには余りにリアリストに違いなかった。②なるほど人かげは見えなかったにしろ、あの崩れた壁のあたりに猫でも潜んでいたかも知れない。もし猫ではなかったとすれば、——わたしはまだその外にもイタチだのヒキガエルだのを数えていた。けれどもとにかく人手を借らずにピアノの鳴ったのは不思議だった。

五日ばかりたった後、わたしは同じ用件のために同じ山手を通りかかった。ピアノは相変わらずひっそりと藜の中にうずくまっていた。桃色、水色、薄黄色などの譜本の散乱していることもやはりこの前に変らなかつた。ただ今日はそれらはもちろん、崩れ落ちた煉瓦やスレートも秋晴れの日の光にかがやいていた。

わたしは譜本を踏まぬようにピアノの前へ歩み寄った。ピアノはいま目のあたりに見れば、鍵盤の象牙も光沢を失い、蓋の漆も剝落していた。ことに脚にはエビカツラに似た一すじのつる草もからみついていた。わたしはこのピアノを前に何か失望に近いものを感じた。

「第一これでも鳴るのかしら。」

わたしはこう独り語を言った。するとピアノはその拍子にたちまちかすかに音を発した。それはほとんどわたしの疑惑を叱ったかと思う位だった。②しかしわたしは驚かなかつた。のみならず微笑の浮んだのを感じた。ピアノは今も日の光に白じらと鍵盤をひろげていた。が、そこにはいつの間にか落ち栗が一つ転がっていた。

わたしは往来へ引き返した後、もう一度この廃墟をふり返った。やっと気のついた栗の木はスレートの屋根に押されたまま、斜めにピアノを蔽っていた。けれどもそれはどちらでも好かつた。③わたしはただ藜の中の弓なりのピアノに目を注いだ。あの去年の震災以来、誰も知らぬ音を保っていたピアノに。

(芥川龍之介「ピアノ」より)

注(*)

震災……一九二三年の関東大震災のこと。スレート……屋根瓦に用いる薄い石板。藜……雑草の一種。高さ一〜二メートルに達する。鍵盤……指先で押して音を出す部分。譜本……楽譜を集めた本。漆……黒色塗料の一つ。

問一 傍線部①の意味を答えなさい。

問二 傍線部②のように筆者が感じたのはなぜか、説明しなさい。

問三 傍線部③に込められた筆者の思いはどのようなものか、ピアノに擬人法が用いられている点に注意して説明しなさい。

問四 傍線部④「片づく」⑤「なるほど」と同じ用法になるように、それぞれ短文を作りなさい。

京都大学大学院 人間・環境学研究所 修士課程 入学試験問題例

1次試験 外国語 (日本語A)

(注意) 解答は、設問(ローマ数字のI、II、III……)ごとに別の解答用紙を用いること。

II 次の文を読んで、後の問に答えなさい。(40点)

私はよく蟬の木彫をつくる。鳥獣虫魚何でも興味の無いものはないが、造型的意味から見て彫刻に適するものと適さないものがある。①私は虫類に友人がはなはだ多く、バッタ、コオロギ、トンボ、カマキリ、セミ、クモの類は親友の方であり、カマキリの三角あたまなどにはことに愛着を感じ、よく自分の髪の毛を抜いて彼に御馳走する。カマキリは人間の髪の毛が非常に好きで進呈すると幾本でも貪り食う。恐れるということを知らない彼の性質も中々おもしろい。しかし彼は彫刻にはならない。形態が彫刻に向かない。バッタ、コオロギもその点では役に立たない。トンボには銀ヤンマのような堂々たる者もあり、トオスミトンボのような楚楚たる者もあり、アカトンボのようなしやれた者もあって、ちよっと彫刻に面白そうに見えるが、これがやはり駄目。彫刻的契機に乏しい。⑦作れば作れるが作るとかえって自然の美と品位とを書い、⑧彫刻であるよりも玩具に近い、または文人的骨董に類するものとなる。その点でセミは大いに違う。彼はその形態の中にひどく彫刻的なものを具えている。

セミの彫刻的契機はその全体のまとまりのいいことにある。部分は複雑であるが、それが二枚の大きな翅によって統一され、総体に単純化しやすく、面に無駄が出ない。セミの美しさの最も微妙なところは、横から翅を見た時の翅の山の形をした線にある。翅の上縁の波形と下縁の単一な曲線との対照が美しい。セミの持つ線の美の極致と言える。木彫ではこの薄い翅の彫り方によって彫刻上の面白さに差を生ずる。この薄いものを薄く彫ってしまうと下品になり、がさつになり、ブリキのように堅くなり、ついに彫刻性を失う。これは肉合いの妙味によって翅の意味を解釈し、木材の気持にしたがって処理してゆかねばならない。多くの彫金製のセミが下品に見えるのはこの点を考えないためである。すべて薄いものを実物のように薄く作ってしまうのは浅はかである。ちよっと逆ならいに作ってよいのである。木彫に限らず、このことは彫刻全般、芸術全般の問題としても真である。むやみに感激を表面に出した詩歌が必ずしも感激を伝えず、がさつで、ダルであることがあり、かえって逆な表現に強い感激のあらわれることのあるようなものである。そうかといって、セミの翅をただいたずらに厚く彫ればそれこそ厚ぼったくて、愚鈍で、ごてごてを着たセミになってしまう。あつくてしかもあつさを感ぜないこと。これは彫刻上の肉合いと面の取扱いとによってのみ可能となるのである。しかも彫刻そのものはそんなことが問題にならない程すらすると眼に入るべきで、まるで翅の厚薄などということは気のつかないのがいいのである。何だかあたり前に出来ていると思えば最上なのである。それが美である。この場合、彫刻家はセミのようなものを作っているのではなくて、セミに因る造型美を彫刻しているのだからである。それ故にこそ彫刻家はセミの形態について厳格な科学的研究を遂げ、その形成の原理を十分に④のみこんでいなければならぬのである。微細にわたった知識を持たなければ安心してその造型性を探求することが出来ない。いい加減な感じや、あてずっぽうではかえって構成上の自由が得られないのである。自由であって、しかも、根柢のあるものでなければ③真の美は生じない。

(高村光太郎「蟬の美と造型」より。一部省略)

注(*)

銀ヤンマ・トオスミトンボ・アカトンボ……いずれもトンボの種類。

ダル……Dull。沈滞し、不活発なさま。退屈な

雰囲気。ブリキ……tin plate。薄い鋼板に鍍でメッキしたもの。

根柢……根柢や確かな拠り所。どてら……

…綿を入れ大きめに作った広袖の着物。防寒具。

問一 傍線部①は、どういう意味か、説明しなさい。

問二 傍線部②は、どういう意味か、説明しなさい。

問三 傍線部③について、作者が考える「真の美」とはどういうものか、説明しなさい。

問四 傍線部④の「しやれたるがさつ」とかえって「である」と同じ構文を用いて、短文を作りなさい。

問五 傍線部⑤の「のみこむ」と同じ用法になるように、短文を作りなさい。